

学会ニュース

日本女性学会

第1号 1980年2月

はじめに

昨年の6月、マスコミの脚光を浴びて華やかに出発した日本女性学会は、その後日本全国からの問合せや入会希望者の整理などに追われて、ようやく最近になってこのニュース・レターの第1号をお送りできる運びとなりました。世話人や発起人は決して怠けていたわけではなく、それぞれ教職や評論活動、職場と同時に家庭を抱え、文字通り現代の女性問題を身を以って実践しつつ、熱心に会合を重ねてきました。東京だけでなく関西からも自費で出張し、一部の人は毎週1～2回事務局へ行き、会合をもち話し合い、電話で連絡をとり、とにかく一生けんめいにやってきました。

出発当時の予想に比べて入会申込みのあった数が少く、従って会費の納入も充分でなく、会員増のためかなりの時間を費したことも、当初に予定していなかったことでした。そのため既に入会された方からは、再度のお問合せや、中にはお叱りも受けました。しかし「女性学」という日本で草分けの——しかし現代で最も必要とされる分野のこの学会は、会員一同が自分たちの学会として一致協力してつくりあげて行くものです。すべてはこれからの問題です。

出発以来いろいろと取り組んできた者にとっては、短いと思われる時間でしたが、これからいよいよ各分野で、各層で、実際の歩みを進めることになるわけです。

今後の予定としては3月末の第1回研究報告会、会員の確保、名簿の整理などと同時に6月までには総会をもって規約の制定をおこない、その後は夏休みにかけて、各地で女性学の公開講座を開催し、その間に会員の交流をはかり、次第に活躍の速度と質を増して行きたいと思っています。ニュース・レターも発行していく予定です。発起人は現在のところ設立準備委員としてすでに数カ月にわたって規約の草案づくりや準備をすすめています。

発起人の中にはわが国では未開拓の女性学に関して、アメリカや諸外国と関連をもって活躍している専門家が多く、今後は会員各位とともに必ずわが国の女性学を推進することができるという自信を持っています。

1980年代は女性の時代といわれます。この学会の責任は重大です。会員一同団結しましょう。

日本女性学会設立趣意書

昭和54年6月18日

日本女性学会設立発起人

日本における女性学の確立を目標として日本女性学会を設立する。「女性学」とは、人間としての女性尊重の立場から、学際的に女性およびその関連の諸問題を研究する学問であり、女性の視点(立場)をもって既成の諸学問を洗い直すものである。

いま、世界的に人間性の回復あるいは尊重の願いが昂まりつつあるが、女性学もそのような社会的背景の中から台頭し、今後の発展が期待されている。

さて、東洋における女性の社会的状況は欧米のそれと異なる点が少なくないが、その中でも女性をめぐる諸問題は、早急に研究され解決されなければならない点を数多く含んでいる。わが国における女性学研究は漸く緒についたところであるが、昨今、研究者間の交流と日本における独自の女性学の確立と発展に役立つ場の設定が要望されるようになった。

このときにあたりわれわれは「日本女性学会」を発足させ、両性の協力のもと、人間の未来への検討も重ねながら、女性社会参加を進め、女性の社会的状況を変革することに尽力したいと考えるものである。

女性学の対象は、日常性そのものの中にあり、したがって本学会には既成の学会の慣習にとらわれぬさまざまな立場の人の参加を期待したい。また、日本は国際交流の接点として各国の女性学研究との比較、交流も行いやすい立場にあるといえよう。

本学会は上記の目的に沿って設立され、今後、参加者による民主的、主体的な運営によって、女性学研究者の交流の場となることを願うものである。

日本女性学会とは…

上に掲げた趣意書のもとに、女性にかんするさまざまな問題を、女性学として体系化する目的で、地道に研究していくために、昭和54年6月に設立され、現在の会員数は約80名。

発起人は渥美育子(青山学院大助教授)、池上千寿子(翻訳家)、漆田和代(ライター)、片倉もとこ(津田塾大教授)、小林富久子(早稲田大助教授)、駒尺喜美(法政大教授)、白井堯子(慶応義塾大講師)、野口栄子(大手前女子大教授)、藤枝滯子(京都精華大教授)、富士谷あつ子(評論家)、キャサリン・ブロデリック(神戸女学院大助教授)、松原純子(東京大講師)、水田宗子(南カリフォルニア大助教授)、安田富貴子(橘女子大教授)、米田佐代子(都立大助手)―アイウエオ順―で、その発足はすでにマス・コミにもとりあげられました。会員は全国各地におよび、第1回研究報告会として、第4面に記載の催を予定しています。その後6月ごろから総会や公開講座をおこないますが、会員は女性の現状にたいし、やむにやまれぬ気持ちから集った者ばかりなので、今後の活動が期待されています。

女性学関係図書の紹介

富士谷あつ子編

女性学入門

サイマル出版会 1979. 10. 25. 発行

「女性学」について、わが国でまとまった著作はまだ数少ないが、これはその中でも水準の高いアカデミックな労作である。日本女性学会の発起人の何人かも執筆しており、さまざまな分野から「女性学」を体系化している点に特色がある。編者は勿論日本女性学会の発起人の一人である。京大で生物学を専攻し、その基盤から人間の一とくに女性の生涯教育と国際交流に関心をもち、近年多方面な活躍をつづけている。第1章女性学とは何か、第2章女性研究へのアプローチ(生物学、医学、心理学、文化人類学、文学などの立場から)、第3章世界の女性たち(日本、アメリカ、フランス、イスラーム、中国)、第4章女性の社会参加、という内容で、わが国における女性学の現状と問題点を知り、考えをすすめるためにはまさに適切な著作である。

座右の書としておすすめしたい。

渥美育子著

女性文化の創造へ

ELEC出版部 1978. 10. 20. 発行

本書は、著者の内面を一番よく表明した、「女性文化のふくらみを」を巻頭に、以下
第Ⅰ章 エリカ・ジョングとの対話
第Ⅱ章 女性文化の時代へ
第Ⅲ章 女性存在の原型を求めて
を配し、「初出一覧」を付し、「あとがき」
で締めくくっている。初出一覧に明らかなように、著者がここ2～3年来、雑誌・新聞等に発表して来たものの改稿から、本書は成っている。それだけに著者の「女性文化の創造へ」向かっての精神の軌跡が窺われる。

著者は日本女性学会発起人であり、フェミニズム運動をすでに数年来すすめている。本書ではアメリカの女性芸術家たちと、詩人でもある著者との交流を主としているが、女性文化創造の行為のエネルギー源は、フェミニズムの精神だと主張する著者が、今後「女性学」の角度からのサーチライトを、日本の女性文化創造へあてることが期待される。

水田宗子著

鏡の中の錯乱 (シルヴィア・プラス詩集)

シルヴィア・プラス (受難の女性詩人)

牧神社 1979. 4. 15. 発行

「女性学」の盛んなアメリカに在住し、女性学と文学を研究し、南カリフォルニア大学の助教授として活躍中の著者は、日本に帰国中は日本女性学会の発起人としても熱心な発言をつづけている。この2冊のシルヴィア・プラスに関する研究は、1つのサックに納められ、まとめて読むことができる。

プラスは近年アメリカで問題になっている女流詩人で、従来は詩のテーマとなりにくかった女性の性や結婚、出産などを独自の感覚で詩作し、同時に作家・大学教授・妻そして母の役割を果たした。1932年生れで、詩人テッド・ヒューズと結婚したが、テッドが別の女性と住みはじめたため離婚し、1963年に自殺した。生命と引きかえに作った詩は、フェミニズムの詩の伝統に大きな影響を与えている。

駒尺喜美著

魔女の論理

エポナ出版 1978. 6. 1. 発行

著者は国文学の専攻で、日本女性学会の発起人の一人である。従来男性の側から発想され、規定されてきた人間と社会の問題を、近代の日本文学を通して、女性の立場から洗い直し、考えなおしていこうとする姿勢に満ちあふれた著作で、現代の日本人 — いや世界中の人々 (男女とも) にぜひ読んでほしい本である。

現代の社会や文化は男性中心につくりあげられてきたというのが、実際にどのようなことなのか。結婚・愛・夫婦間の問題 — それらは文学にどのように反映しているか。五木寛之氏の「目のウロコが落ちる思い」という評からもわかるように、著者は現代人に手きびしいしかも本質的な課題を提出している。そして不便でも、奴隷を解放した後の人類が、尊重し合う人間同志の関係に進んだのと同じ道を、男女間にも提言することが結論になっている。

参考資料

女性学に関連のある

研究会名と所在地

入会について

日本女性学会では、会員の入会をひろくよびかけています。各分野で孤独な頑張りをつけながら、それを女性学として理論化したり具体的に考えていくことに関心をおもちの方、またこれまで小さい仲間づくりをすすめてきた方々など。

会員資格

現在、何らかのかたちで女性学研究を行っている者（性別・国籍を問わない）で、本会役員によって入会を認められた者。

申込み

下記のことを事務局宛に送付する（50円切手と返信用封筒同封のこと）。

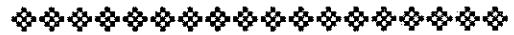
○履歴書 ○自分の行っている研究または仕事の概要（400字詰原稿3枚）

上記のものを事務局で受領後、本学会役員で審査の末、参加の諾否を連絡する。事務局よりの連絡後、会費を所定の用紙により振込む。

年会費

一般会員 4,000円

賛助会員 { 個人 一口 30,000円
法人 一口 50,000円



事務局より

日本女性学会の学会ニュース第1号をおとどけします。これと同時に会員の仮名簿と会員の登録カードをお送りしますので、登録カードには差しつかえない範囲で結構ですから各自で御記入の上、お手数でも事務局宛に返送してください。そのさいなるべく折れないようにお願いします。（郵送料も各自で御負担ください。）後日に名簿をつくり直します。

この学会ニュースには、会員の著作のなかから女性学に関係のあるものを一部紹介しました。参考資料として女性問題の研究会名と所在地も一部記載しました。これから次々と掲載しますので、著書・研究会などの情報があればお知らせください。

（編集責任者 野口栄子・安田富貴子）

日本女性学会第1回研究報告会のお知らせ

日時 昭和55年3月28日（金）午後3時より6時まで
テーマ ボヴォワール「第二の性」刊行30周年記念フェミニズムの国際会議（於 ニューヨーク大学）および全米女性学会についての報告
報告者 渥美育子（青山学院大学助教授）
場所 東京都千代田区霞ヶ関3-2-5
霞ヶ関ビル33F 東海大学校友会館

地下鉄銀座線 虎ノ門駅より徒歩7分
日比谷線、千代田線 霞ヶ関駅より徒歩7分
霞ヶ関ビル内（駐車場完備）

研究報告終了後、懇談会を開催します。臨時会費 500円

この第1回研究報告会についてのお問合せは下記へお願いします。